

山川菊栄の「武家の女性」は、支配者たちの家族を描いてとても面白かった。同じ支配階層出身の杉本鉞子「武士の娘」も、女性が具体的にどんな教育を受けたか分かって興味深い。ともに男性支配の支配階級で、まさに家父長制がウルトラ貫徹している社会である。しかも、杉本鉞子「武士の娘」は家父長制下で教育を受けた女性が、アメリカで美しい所作を見せて生活し、夫の死に伴って一時は帰国するが、再度渡米して文筆業で生計を立てていく。後年、彼女はコロンビア大学の講師になっている。

アリス・ベーコンが「明治の女」で次のように言っている。

日本の上流婦人は、結婚と同時に自由を放棄し、夫と義理の両親に服従し、かれらの召使いとなる。年がたつにつれ、その表情には、あきらめと、自己犠牲ばかりが続く人生の苦労の痕跡がみられるようになる。一方、農民の女性は、結婚した後も夫と一緒に仕事することで、単調な家事以外の興味深いことも経験するようになる。裕福であり働かない上流階級の女性と比べて、農家の女性の表情からは苦悩や失望は感じられなくなり、歳をとるにつれかえって個性豊かになり、人生をより楽しんでいるように見えてくるのだ。

フェミニズムは家父長制が女性を抑圧した原因だと言う。しかし、家父長制下で生きたのは江戸時代でも武士たちだけ、つまり人口の20%位だろう。残りの80%の農民は家父長制下にいたとは言いにくい。夕方、空になった荷車に妻子を乗せて、夫が引いて帰途につく姿からは強権的な家父長制ではなく、共に働く思いやりを感じる。

柳田国男は「婚姻の話」で次のように言っている。

日本の婚姻において、女性が法外に素直であり忍従であったということは、一般の印象かと思われるが誤解である。これは武人という一部の階級に、それも近世に入ってから、やや強調せられていた慣行の名残であって、これを全国の生活を代表するもののごとく、見たり考えたりしたことがそもそものまちがいだ。武家ならばそういう必要がかつてはあった。それに基づいて一種の教育法が固定し、もはや必要のない時代まで引続いて、これより以外の方式に依ることを得ざらしめたのである。P30

明治政府は支配者だった武士の家族制度を採用して民法を制定した。そのため、近年まで全国的に家父長制がはびこってしまった。しかし、主婦権が強かった農村部では、家父長制は弱く女性の発言権は強かった。家父長制を信じる大学フェミニズムは上位20%の

生活から、すべての女性の生活を見てしまったのだろう。これでは女性の本当の姿は見えない。家父長制に逃げずに、女性が劣位に置かれた原因を考えなければ、女性の地位は把握できない。その理由はあとで考えるとして、結婚の新旧について考えてみる。

団塊の世代の結婚では仲人や媒酌人を立てたが、現在では仲人を立てる結婚式は首都圏では1%だけとなった。では仲人はいつから立てられるようになったのだろうか。阪井裕一郎は「仲人の近代」青弓社 2021年 で次のように言っている。

仲人は一般に理解されているような、広く伝わる「日本の伝統」とは必ずしも言いきれないということである。(中略)明治になるまでは仲人という慣行は武家や農村の一部上層階級にだけ定着していたものにすぎず、全国的に普及するのは明治以降のことだった。日本の近代化の最初の局面で、「仲人結婚」が農民や都市の労働者階級など階層を超えて民衆レベルにまで広がっていったのであり、結婚の「家族的統制」の側面はむしろ強まる傾向をみせた。となれば、仲人の仲介による見合い結婚が「伝統的」であり、個人が自由におこなう恋愛結婚が「現代的」だという今日の社会に流布している認識は、あくまで戦前から戦後の変化を示したものにすぎない。P 14

高度経済成長期において会社がらみの職場結婚が多くなると、男性上司を媒酌人＝仲人に頼むようになる。媒酌人は媒の字を女扁に書くように、もとは女がする役割だった。女から男の仲人への変化は、年齢秩序に従った男性支配の会社もたらす経済力で家族が再編される過程だった。ここで会社における家父長制が家族にも敷衍されたのではないか。終戦時でも農業人口が約50%だったことを考えると、明治になって採用された庶民における家父長制は家族から始まったのではなく、年長男性支配の会社（現代の会社も老人支配なことは有名）から家族へと普及したのではないだろうか。

戦前までの我が国では農村部の通婚圏は約10～20キロで、結婚対象となる男女は互いに日々の農作業を通じて顔見知りだった。田や畑での労働を通じて、働き者か否かも周知されていた。結婚は若い労働力の移動だったから、結婚によって若い娘が生家から引き抜かれるのは困ったことだった。そのため、結婚しても婚家に移らずに、子供が産まれるまで生家にとどまる例が多かった。嫁が婚家に移るまでは、婿が夜な夜な通ってきた。

明治まで農家の主婦は篋権(へらけん)＝杓子権をもって家族の生活を仕切っていた。主婦の仕事は膨大にあり、主婦が家族全員の衣食に責をおっていた。主婦の仕事は対外的な役割を担った夫の仕事に対置する重要度が充分にあった。囲炉裏の主人席は横座であり、主婦席は嬬(かか)座で固定されていた。主婦の代替わりを篋譲り＝杓子渡しといい、家内

を仕切る主婦は一軒に2人は存在できず、簞讓りをした姑は隠居した。女が結婚するのは主婦になるためであり、厳しい姑から次期主婦になるための実践的な教育を受けた。誰でもなれる今日の主婦とは内実がまったく違っていたのである。

西洋諸国と違って、我が国の主婦は夫の働きに感謝しながら給与袋ごと受け取り、夫は主婦から小遣いをもらう形が多かった。僅かな小遣いも自由にならない西洋諸国の主婦は家父長支配下にあるといえるが、家族内の全経済を握っている我が国の主婦は家父長支配下にあるといえるだろうか。瀬川清子は「婚姻覚書」で次のように言う。

近世、家というものは、非常に血縁的人情的にばかり考えられていたが、農家のように家の耕地を家族の労力で経営して家族の食糧を得るという風に、家が職場である所では、家族が一つの労働組織であるという観点に立たなければ、手で働いて生活した人々の共同生活がわからないと思った。P20

日本の農業は今日もそうであるが、家族の労働力による家単位の小経営で、しかも半世紀前までは、それによって家の生活が保たれなければならない唯一の家業であった。そういう場合に、縁が成立したからといって最も有力な娘の手を突然に失うということは大きな打撃で、このことは嫁の引移りによって婚姻生活を開始する嫁入婚の大きな障害の一つであった。嫁入りの式はするが、式後里方に帰って当分の間里方に婚舎を置き、嫁は従来通り里方の家族として働く、多くの足入式の婚姻もこの難点を処理して、婿入婚から嫁入婚への過渡期の破綻を調整する役割を果たしたもので、婚姻様式の変革と家及び社会生活の変革の進度は、大観すれば相伴ってはいるが、部分的には互にずれがあったのである。P175

農耕社会の女たちは必ずしも家父長制下にはおらず、生きるために田畑そして家内で働いた。近代になって女が稼ぎを失い子産みをする専業主婦となって、主婦権と嬢座を失って家父長制に組み込まれたのだ。専業主婦は農家の主婦と違い生産労働に従事せず、仕事は家政婦のそれとセックスの相手でしかなかったにもかかわらず、奥さんとか奥様(かつての上流階級の呼称)と呼ばれる立場に酔いしれた。女性は愛される幻想=ロマンティック・ラブによってマインドコントロールされて、男性支配の<愛>の核家族に送り込まれたのではないか。無収入の専業主婦(パートを含む)は、歴史上もっとも男女差が大きい劣位に置かれていることに気づいていない。

しかし、専業主婦に収まった女たちこそ男と同じ教育を受けており、専業主婦の家事労働

は一人前の女にとって手応えがなさすぎた。アメリカの専業主婦たちは生きる手応えを求めて胎動を始めた。1963年に出版されたベティ・フリーダン『女らしさの神話』（邦題「新しい女性の創造」）が回答を出した。

アメリカの女性は、ひと昔前の女性、また他国の女性が夢にも見なかったようなぜいたくな暮らしをしているのだから、悩みなどはないという考えに私は反対だ。この悩みは、昔からある物質的な諸問題—貧乏、病気、飢餓、寒気—とは無関係なのだ。

この問題で苦しむ女性は、食物がいやすことのできない飢えを感じている。この悩みは、物質的に恵まれないからおこったのではない。飢えや貧乏や病いの苦しみと必死に戦っている女性はこんな不満で苦しみはしない。それに、もっとお金が、もっと広い家が、もう一台自動車があれば、もっとよい郊外へ移れば、この悩みは解決するだろうと考える女性は、希望がかなっても、さらに悩みが深刻になっているのに気づくのだ。P 24

彼女たちは立派なインテリ女性であり、彼女の家庭や夫や子供や彼女自身の才能は、人々がうらやむほどのものだった。なのに、どうしてこんなに多くの主婦が悩んでいるのだろう。後になって、同じような現象を、同じような住宅地に発見して、私は偶然の一致であるわけがないと考えた。これらの女性には次のような共通点があった。人並み以上にすぐれた知性と才能に恵まれ、少なくとも大学教育はかじっていたが、郊外地の主婦としての実際の生活では、彼女たちの才能を活かすチャンスなどはなかった。P 168

我が国ではフェミニズム学者こそ増えたが、彼女たちは第二波フェミニズムが専業主婦を否定したことを理解できなかった。彼女たちは専業主婦も女であるという理由で、家事労働を不払い労働として専業主婦を擁護した。それは夫という男を支え従属する役割を認め、性別役割分業という男性支配の社会構造を強化することだった。配偶者控除でも分かるように男性支配は専業主婦を残したいのである。女であるという理由で専業主婦の存在を肯定する限り、男性支配は安泰であろう。我が国の現状は、『女らしさの神話』が描いた1960年当時のアメリカの状況と変わっていない。

反少子化キャンペーンは愛玩の対象としての子供ではなく、労働力の欲しい男性支配が求めているのではないか。フェミニズム学者は男も家事・育児をとというが、主婦権は一家に一つしか成立しないから、男女が同じ役割であろうとする核家族は単家族に分裂せざるを得ない。